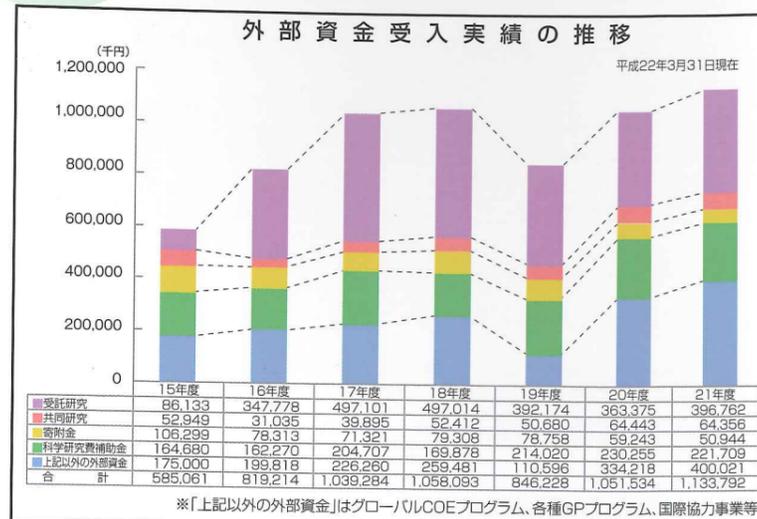


## 外部資金受入額が過去最高に

平成21年度の外部資金受入額は、受託研究や国際協力事業の増加等により過去最高額となりました。



## 帯広畜産大学の概要

### 1.大学の沿革

昭和16年4月	帯広高等獣医学校
昭和24年5月	帯広畜産大学
平成16年4月	国立大学法人帯広畜産大学 畜産学部（獣医学課程、畜産科学課程） 大学院畜産学研究科（修士課程、博士前期・後期課程）

### 2.学生数

	男	女	計
学部	624	527	1,151
大学院（修士・博士前期）	60	60	120
同（博士後期）	18	11	29
別科	29	8	37
合計	731	606	1,337

※平成22年5月1日現在

### 3.留学生数

	男	女	計
22カ国から	38	28	66

※平成22年5月1日現在

### 4.役員・教職員数

役員	6人	(3人)
教員	129人	
事務・技術等職員	92人	
合計	227人	(3人)

※平成22年5月1日現在、( )は非常勤で内数

## 学長からのメッセージ

知の創造と実践によって  
実学の学風を発展させ、  
「食を支え、暮らしを守る」  
人材の育成を通じて、  
地域及び国際社会へ貢献する。

帯広畜産大学長  
長澤 秀行



農業活動によって生み出される「食料」は、人類の生命維持に欠くことのできないものであるだけでなく、健康で充実した生活の根幹を支えるものであります。また、あらゆる地球規模課題（食料不足、貧困、環境破壊、エネルギー問題、紛争等）に農業は深く関わっております。これらの課題を解決するためには、特に感染症等の疾病から人と動物の健康を守る「獣医分野」と農作物・食品の生産性向上と安全性を確保する「農畜産分野」を融合した知識・技術が不可欠となっております。大学の基本使命は「人を育てる」ことであり、帯広畜産大学は、我が国唯一の国立農学系単科大学として、地球規模課題の解決を視野に入れた農業分野の専門知識・技術の教育研究を通して、国際性のある人材育成を目指しているところであります。

帯広畜産大学の第1期の基本的目標は、「実践的教育の充実」、「世界をリードする研究者の養成」、「地域社会並びに国際社会との連携」の3つの理念を掲げた上で世界最高水準の獣医・農畜産系大学を目指すとして記載しておりました。

第2期においては、前述の大学の目指す方向性をより明確に表現するため、大学のミッションとして「食を支え、暮らしを守る」人材育成を中核として、地域及び国際社会に貢献することを掲げております。

1. 恵まれた自然環境を活かしつつ、潤いと活気があり、豊かな人間性を醸成できるような「学びあいのコミュニティ」を創出する。
2. 獣医・農畜産融合の視点から、幅広い見識と国際性を有し、実践力のある人材の育成を目指す。
3. 生命・食料・環境の分野に関し、地球規模課題の解決に向けて、トップレベルの学術研究拠点となることを目指す。
4. 創造的、学際的な実学研究の成果を社会に還元して、地域及び国際社会の持続的発展に貢献する。

帯広畜産大学ホームページ

<http://www.obihiro.ac.jp>

帯広畜産大学広報室

TEL 0155-49-5228 FAX 0155-49-5229

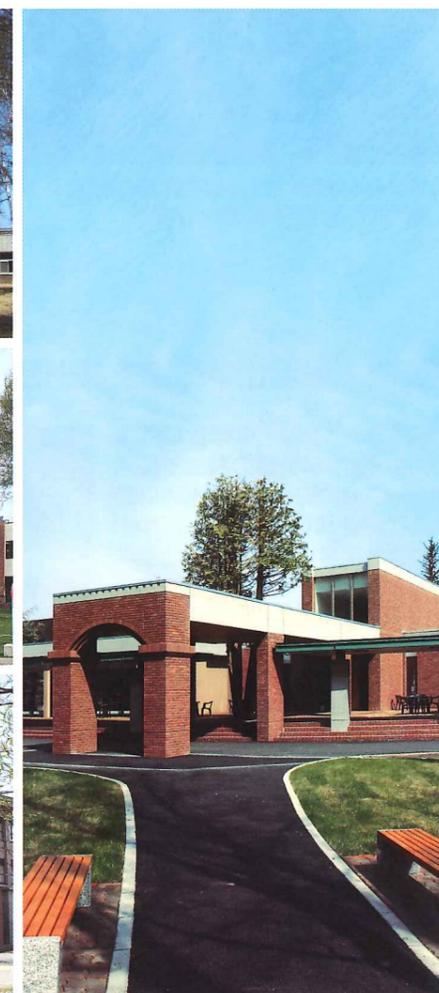
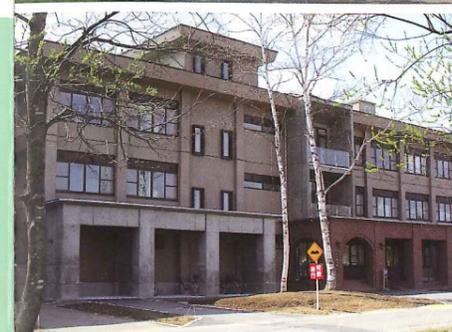
E-mail kouhou@obihiro.ac.jp

080-8555 帯広市稲田町西2線11番地



国立大学法人  
帯広畜産大学の取り組み

平成22年5月



## 新JICA(国際協力機構)との連携協定締結

平成22年4月8日、全国の大学に先駆けて新JICA(国際協力機構)と連携協定を締結しました。JICAは、平成20年10月に国際協力銀行(JBIC)のODA部門を統合し、我が国の総合的な援助機関「新JICA」として始動しています。本学は、平成17年2月に我が国の大学として初めて当時のJICAと連携協定を締結し、獣医・農畜産分野における国際協力人材の育成と開発途上国への技術協力を推進しておりますが、今後とも、新たな協定締結により両機関が一層連携して、国際社会に貢献していきます。



署名した協定書を手交する長澤学長とJICA 帯広国際センター佐々木所長(右)

## 海外の大学との学術交流協定を充実



ボゴール農業大学において協定に署名し、握手する長澤学長と Herry 学長

本学は、「食の安全確保」に関する国際的連携活動を推進するため、諸外国の大学等と学術交流協定を締結して、教員及び学生の相互交流や国際共同研究を行っています。

平成21年度は、新たにインドネシアのボゴール農業大学との間で学術交流協定を締結しました。ボゴール農業大学は熱帯農業と生命科学を中心とする農業分野の教育研究においてインドネシアで最も高い評価を得ている大学です。

本学と学術交流協定を締結している海外の大学は14か国19大学となりました。

## 財団法人横浜企業経営支援財団と産学官連携協定を締結

平成21年12月、本学は横浜市内の中小・中堅企業の経営支援活動を行う公的支援機関である財団法人横浜企業経営支援財団(通称:IDEC)と産学官連携に関する基本協定を締結しました。

IDECは、横浜にはない研究シーズを持ち、先進的な産学官連携活動を行う全国の大学と幅広く協定を締結しており、北海道では本学が初の締結となります。

今後は十勝の企業ニーズと本学の研究シーズを積極的に発信し、横浜をコアとした首都圏における産学官連携の推進により、十勝の産業振興に貢献します。



平成22年3月に十勝の食品の商談会をIDECで開催



## 帯広畜産大学は、農場から食卓までの「食の安全確保」に貢献します。

### 地域連携推進センターと動物・食品衛生研究センターを設置

地域のみならず、本学への産学官連携、生涯学習などの相談、要望について迅速に対応するため、産学官連携活動の窓口である地域共同研究センターと、社会貢献活動の窓口である地域貢献推進室を再編統合し、平成22年4月より「地域連携推進センター」を設置し、ワンストップサービスを行っています。

今後、本学へのご相談・ご要望等は、本センター(0155-49-5771 / E-mail: crcenter@obihiro.ac.jp)をご活用ください。

また、大動物特殊疾病研究センターは、動物衛生及び食品衛生に特化した、地域の「食の安全確保」に貢献する研究組織として、平成22年4月より「動物・食品衛生研究センター」と名称を変更しました。本センターへのご質問等は、(0155-49-5889 / E-mail: rcahfs@obihiro.ac.jp)にお願いします。

### 原虫病研究センターが共同利用・共同研究拠点に認定

我が国全体の学術研究発展のため、国公私立大学を通じた共同研究体制を整備する「共同利用・共同研究拠点」の認定制度が創設され、平成21年6月、本学の原虫病研究センター(写真)が文部科学大臣より「原虫病制圧に向けた国際的共同研究拠点」に認定されました。



### アフリカ・マラウイ共和国で「草の根技術協力事業」を開始



マラウイに派遣した本学学生と現地農民

平成21年度から、アフリカのマラウイ共和国においてJICA草の根技術協力事業「耕畜連携システムによる食料の生産性向上と安定的確保」を開始しました。

本事業は、世界の中でも最貧国に属するマラウイにおいて、農民が負担する化学肥料の購入を可能な限り抑制し、家畜糞尿などの資源を堆肥として有効活用する「低投入型農業技術」を普及するものです。

マラウイの農作物が安定的に確保され貧困世帯が減少することを旨とするともに、活動地域は本学の学生が国際協力経験を積み場としても活用します。

## 「獣医師国家試験」全員合格

平成21年度獣医師国家試験の結果が3月18日に農林水産省から発表され、本学からは、本年度卒業の40人全員が合格しました。

このことは、本学としては20年振りの快挙であり、獣医学ユニットでのきめ細かい指導はもとより、クラス全員でレベルアップに取り組んだことが実を結びました。



実習風景

## 「別科50周年記念式典」

別科創立50周年記念式典及び講演会が、平成22年3月20日、本学講堂において、約400名の同窓生・大学関係者の参列のもと執り行われました。

別科(草地畜産専修)は、地域に密着した農学を学ぶことにより地域社会の指導者となるような農業後継者を育成することを目的とし、昭和35年4月に設置され、1090名の同窓生を数え、道内はもとより広く全国にわたり、畜産・農業の担い手、公共団体・農業指導関係機関の技術指導者として第一線で活躍しています。

記念式典に引き続き、「奇跡のリンゴ」の著者である木村秋則氏、本学別科6期生で「読売文学賞」を受賞された時田則雄氏の記念講演(写真)が行われました。



## 厳しい状況の中、高い就職決定率を確保

平成21年度卒業生2577人のうち、就職希望者171人中就職が決まった人は165人で、就職決定率は96.5%となりました。昨年より、2.2ポイント下回ったものの、長引く不況の影響もあり、全国的に厳しい就職状況の中、高い就職決定率を確保したといえます。平成21年度からは、「インターンシップ」に加え、「基礎キャリア教育」科目を2年次後期に開講し、就職支援を行っているほか、就職が内定した学生が中心となって、「帯広畜産大学就職応援団」を結成し、就活に臨む学生の就職支援を行いました。

## 研究棟や学生寄宿舍など施設整備を充実

図書館、体育館の耐震補強や学生寄宿舍、総合研究棟Ⅱ号館の耐震補強を含む全面改修により、安全な教育環境や居住環境の充実とともに太陽光発電や地熱の利用など、環境に配慮した整備を行いました。また、塀に囲まれ閉鎖感があった正門を広く開放的で十勝の景観に馴染むデザインに改修したことや学生や教職員更に地域の皆さんが集える場所として「かしわプラザ」(写真)を整備し、魅力ある開かれたキャンパスを目指し、施設環境整備の充実を図りました。

